

ぎふスポ TOKYO 2020

大病克服 記録へ駆ける

突然降り掛かってきた病気を乗り越え、新たに開かれた夢舞台で頂点を目指す。各務原市在住の石田駆選手(20)は愛知学院大(2)はパラ陸上(T46・上肢障害)の男子100㍍、400㍍の日本記録保持者。パラ参戦二年目の今季、「東京パラの出場を決めて金メダルを取りたい」と誓う。

(沢田石昌義)

高校まで陸上選手だった父親に似て、幼少期からかけっこが大好きだった。「両親から名前の通りになった、とよく言われた」と笑う。

中学校で始めた陸上では全国大会に出場。岐阜聖徳学園高校(岐阜市)三年時には全国高校総体の400㍍に出場した。「全中、インターハイと流れをついてこられた。全日本インカレにも出たい」と、スポーツ推薦で愛院大に入学したばかりの二〇一八年春に人生が一変する。

練習中、左肩に違和感を覚えた。痛みはなかったが、肩には十センチ近いりができていた。精密検査の結果、骨肉腫と診断され、

医師からは再発防止のため「左腕を切断するのが一番良い」とも勧められた。「普通にピンピンしてスポーツもしていたし、何で人生変わらなかつたあかんのや」。絶望感と喪失感に襲われた。それでも諦めなかつた。「陸上をやめる選択はしなかつた」。腕が残るなら、と人工関節を入れる治療を選んだ。肩関節と左上腕の筋肉を除去する手術は十三時間に及んだ。

六月の手術後、懸命なりハビリで約半年後に競技復帰。しかし、左手で重い物を持つことも、つり革につ

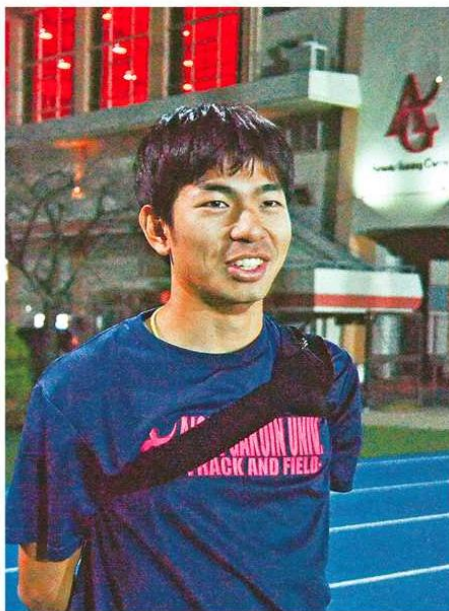
かまることもできなくなつた。トレーニングで上半身を鍛えることも制限された。限られた体力強化の中、パラ陸上に初参戦した昨年、新星として名乗りを上げる。長良川競技場であった七月のジャパンパラ陸上の短距離二種目で日本新記録を樹立。驚くべきは、高校時代に出した100㍍の自己記録を上回ったことだ。「あれ、この体になつて記録を出しちゃった」。病前の自分を越え、自信を深めた。

高校時代から指導する岐阜聖徳学園高の高木伸吾監督(48)は「病前よりスピードは上がった。復帰から土台も出来上がっている」と期待を寄せ、本人も「フランクがあつた分、まだ体力が戻っていない」。

ラの出場権獲得に一步届かなかったが、五位入賞。初めて背負った日の丸に「中学から『ジャパン』のユニホームを着るのが夢だったので不思議な気持ちだった」と目を輝かせる。



ジャパンパラ陸上の男子100㍍決勝で日本記録を更新した石田さん(昨年7月、長良川競技場で)



東京パラリンピックで金メダルを目指す石田さん(愛知県日進市の愛知学院大で)

いしだ・かける 1999年4月生まれ。400㍍の49秒44、100㍍の11秒18は日本記録。趣味は車を運転して温泉や銭湯をめぐる。自らチューンアップも手掛けるほどのカーマニアで、輸入車や高級車の車種をすぐに言い当てる特技も持つ。171㍍、57㍏。

新しく抱いた東京パラリンピックでの金メダルという夢。健常者と同じ土俵で戦う全日本インカレ出場という目標を追いながら、自国開催の祭典を見据える。

競技復帰から一年。「奇跡が起こりまくった一年だった」と振り返り、「障害を背負ったからこそ、新しい世界を開くことができた。前向きになれることを伝えられる立場になった」と、自身の影響力を自覚する。

大切にしているのは、再び走れるようになった喜びだ。手術後に初めて大学のトラックを走った昨冬。トラックの反発力、風を切る疾走感、脈打つ鼓動。その全てが、新鮮だった。半年後にパラ日本記録を出すことになるが、「その時よりも、陸上に戻れた時の方がうれしかった」。仲間が撮影したその時の動画は、今もスマートフォンに保存している。